とある少女は汚される…
少女を嬲る無数の触手

突如、無数の触手が美琴に襲いかかった。
まるで餌を捕らえるかのように、触手は次々と美琴のしなやかな肢体に絡みついていく。
「きゃああっ！」
「なっ……、何よ、これっ……？」
ぬっ
ぬらっ
ぬるっ
ぬりゅ

ヌロ……ヌロロ……。
触手たちは美琴の若い身体を楽しむように、
ゆっくりと肌をナメながら進んだ。
「んんっ……！」
触手の一つが美琴の胸にたどり着き、
服の上から乳首を探し当てた。
触手の先端部がクニっと動くと、
美琴は短く声を上げた。
ビクッ
ビクン
むにっ
くにゅっ
さらに別の触手が、
美琴のなめらかな太ももを伝い上がり
スカートの中の下着に達する。
「そんなトコ、ダメえーーーー！」

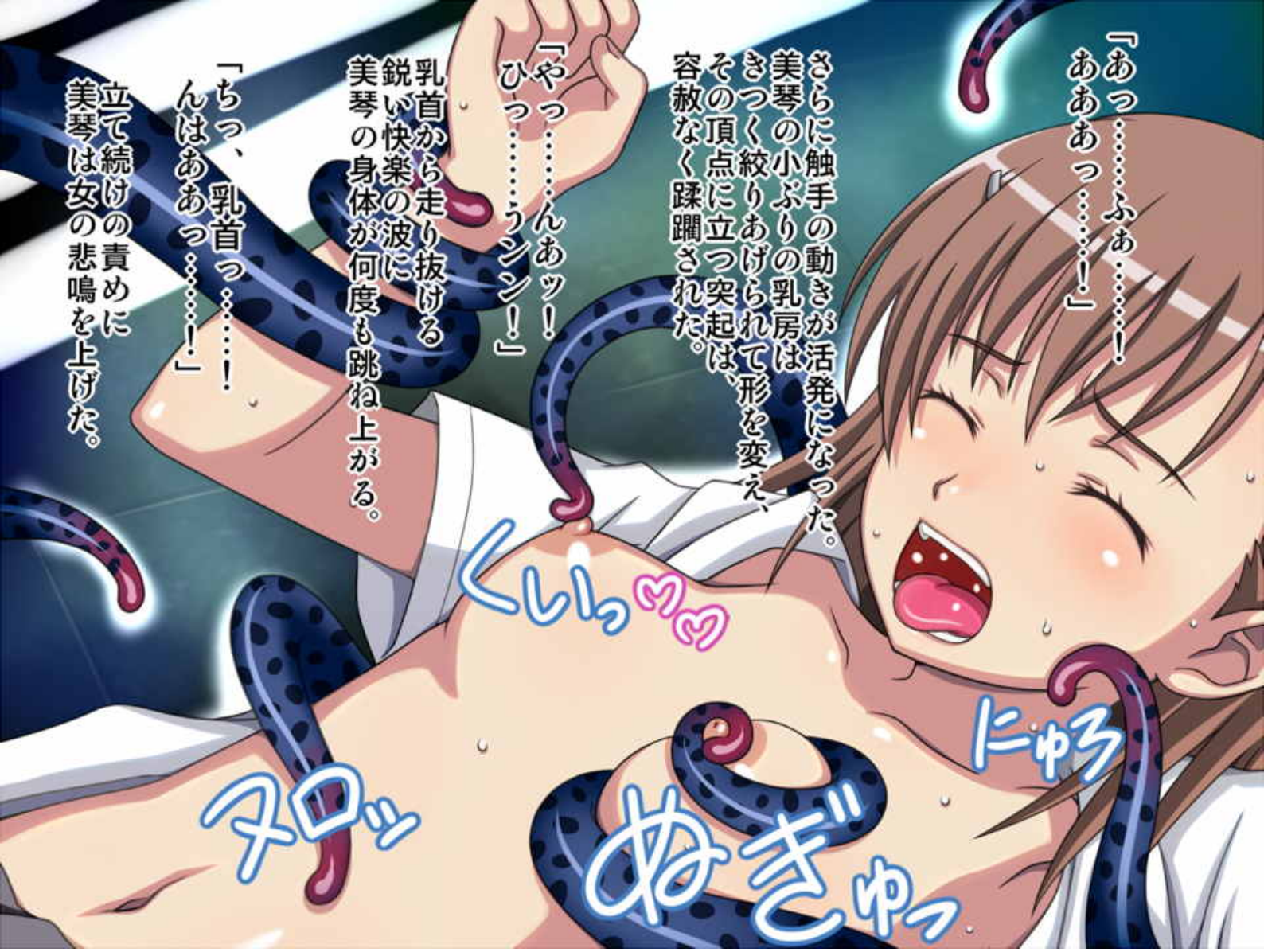
「ちょ、ちょっと……！」
触手に自由を奪われた美琴は
下半身を持ち上げられるような
格好をさせられた。
両足を大きく開かれると
スカートがまくれ上がり、
艶かしいヒップと、
白い下着が丸出しになった。
中央には、女のたて筋が
くっきりと浮かびあがる。
ガバ
「やだっ……！
こんな恥ずかしい格好
止めてよっ……！」
美琴の頬が羞恥に染まった……。

触手の先端が、下着の中に隠された少女の卑猥な割れ目を確かめるように動いた。
「ああっ！」
ビクン、と美琴の身体が反応する。
イヤラシイ窪みに頭を半分うずめると触手はクニュクニュと愛撫を開始した。
「ふっああっ……？」
「まっ…待って！こんなのっ……ひゃっ！」
今まで誰にも許したことの無い大切な部分を責められ、美琴は身体をよじらせてそれから逃れようとした。
くみゅ♡
ぬぢっ
くにっ♡

「んっ……んんー！」
美琴はもがいて抵抗をこころみたが束縛は解けなかった。触手は粘着質にまとわりつき美琴の下半身を幾度もなぶり続ける。
「くっふ……！」
時おり、女の最も敏感な突起を刺激されて美琴の身体は電気を流されたかのようぶるりっ、と震えた。
「あっ……ふうぅ……」
思わず美琴は足を閉じようとしたが、柔らかな太ももに絡んだ触手が、それを許さない。
「んはンっ！」
惨めな辱めは執拗に続いた……。
ぬぎにっ
ぬるっ
にゃんっ
ぐにんっ

「やっ……！」
触手たちはあらわになった美琴の胸をゆっくりと這い登りその先端にある乳首に吸い付いた。
「いふンっ……！」
ニュチニュチと卑猥な音を立てて美琴の乳首が弄ばれ始める。
「だ……めぇ……！」
美琴の表情が、触手の動きに合わせて歪んだ。
ちゅ♡
ぬらん
ぬろ
クニュ♡

「くっ……ふ……ンンッ……！
生まれて初めてうける乳首責めに、美琴は唇を噛んだ。刺激で隆起した乳首を触手に円を描くように転がされ、少女の身体が切なく悶える。
「ンッ……！　ンッ……！」こらえようとしてもどうしても声が出てしまう。
「やめて……よぉ……！」性の衝動に翻弄され、美琴はプライドを踏みにじられた。
クリュクリュ
ヌリュ
にちゅ
チロ

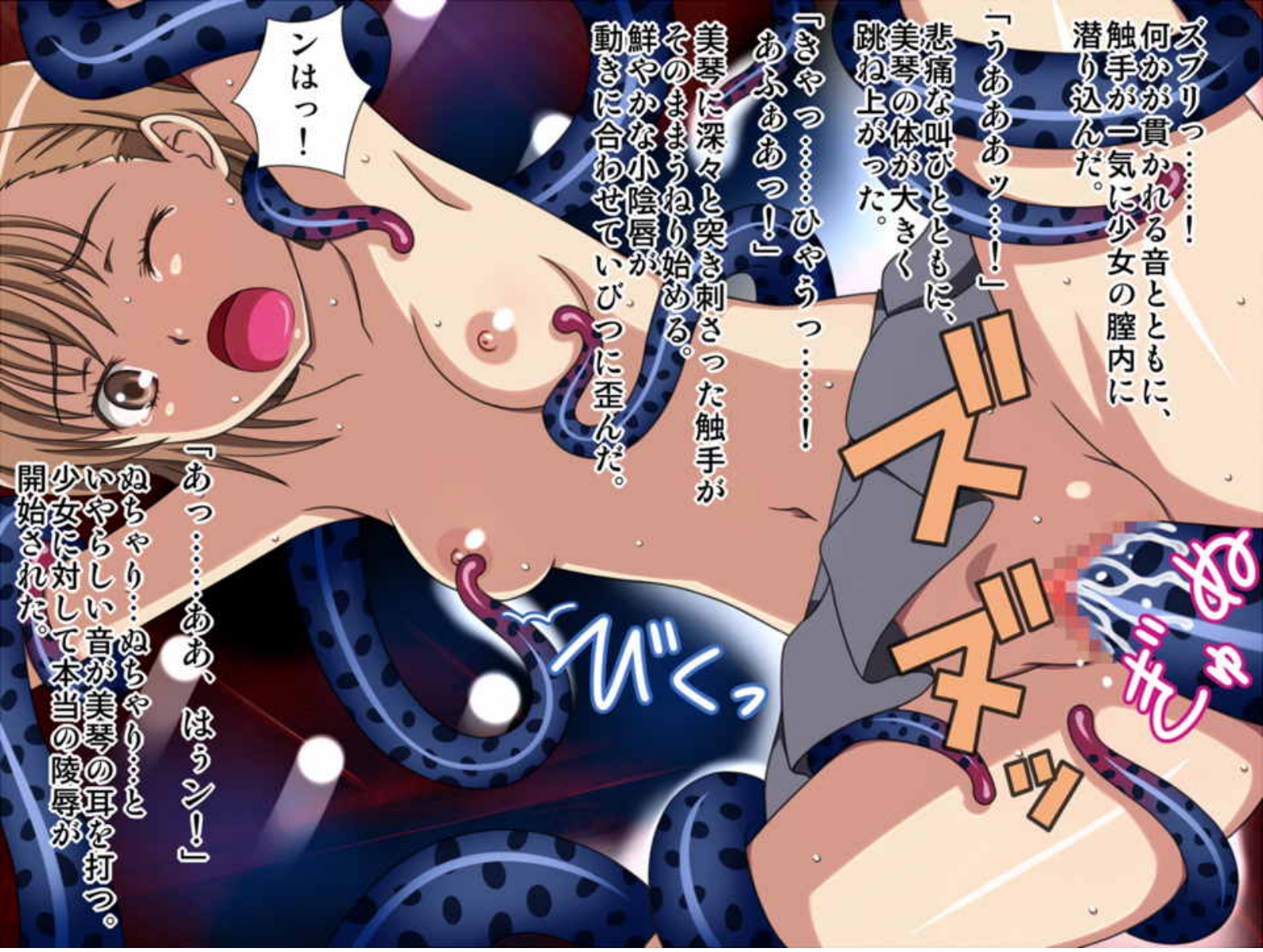

「あっ……ふぁ……！
あああっ……！」
さらに触手の動きが活発になった。
美琴の小ぶりの乳房は
きつく絞りあげられて形を変え、
その頂点に立つ突起は、
容赦なく蹂躙された。
「やっ……んあッ！
ひっ……うンン！」
乳首から走り抜ける
鋭い快楽の波に
美琴の身体が何度も跳ね上がる。
「ちっ、乳首っ……！
んはああっ……！」
立て続けの責めに
美琴は女の悲鳴を上げた。
くいっ
にゅる
ヌロッ
ぬぎゅっ

「ンっ……はっ……あン！」
美琴は上体を前かがみに押さえつけられ、尻を後方に突き出すような格好をさせられた。
「ふっ……ああっ！」
身体のいたる所をヌメヌメとした触手が這いずり回り○学生の瑞々しい肌を余すことなく味わい尽くそうとする。
ぬら
ぬろ
ぷにっ
フニっ
フニっ
にゅっ
「ひやっ……！あっ、あああっ……！」
美琴がもがけばもがくほど、触手たちは興奮を増したように、より貪欲に少女をむさぼった。

「えっ……？」
一本の触手が滑り込むようにして、美琴の下着に絡みついた。
「ああっ……！」
ずるり、と下着が引き下げられ、張りのある艶やかなヒップと、美琴の秘密の部分が露になる。それは少女ならではの淡いピンク色をしていた。
「なっ…何すんのよバカぁっ！元に戻してよぉっ……！」
屈辱的な仕打ちに美琴は叫んだ。
ぐぐっ
にゅっ♡

「……ッ！」
背後から迫るモノの気配に
美琴は気づいた。
「なっ……何これ……？」
美琴はそれを確認し、
表情をこわばらせた。
そこには、
他より一回り太い触手があった。
それが、ビクン…ビクン…と
卑猥に脈打ちながら
美琴の様子をうかがっている。
先端部の形状は、
まるで男性器を模したかのように
いかがわしい姿をしていた。
ヌロリ……。
異質な触手がゆっくりと
美琴の陰部に近づき始めた。
これから何が起こるのか、
美琴は本能的に理解する。
「う……嘘。
そんなモノ、私に……？
や、やめて……」
ぬ…
ぬぬっ…

「いっ……やああっ……！」
触手の頭部が、美琴の大切なところに強く押しつけられた。
「くっ……うあンっ！ンあああぁっ……！」
淡い桃色の谷をまさぐり秘穴への入り口を見つけると、触手は身をくねらせ内部への侵入を開始した。
にちゅり…にちゅり…と水気を含んだ淫靡な音を立て恥肉を押し分けて頭を穴に埋めていく。
あっ
「……やだっ！痛いっ…入ってこないでっ！あああぁッ……！」
自分に入り込もうとするおぞましい感触と恐怖に、美琴は激しく狼狽した。
ぬぶっ♡
ぬぐ♡
ぬぐ♡
ぶる
ぶる


ズブリっ……！
何かが貫かれる音とともに、
触手が一気に少女の膣内に
潜り込んだ。
「うあああッ……！」
悲痛な叫びとともに、
美琴の体が大きく
跳ね上がった。
「きゃっ……ひゃうっ……！
あふぁあっ！」
美琴に深々と突き刺さった触手が
そのままうねり始める。
鮮やかな小陰唇が
動きに合わせていびつに歪んだ。
ズブズブッ
びくっ
ンはっ！
「あっ……ああ、はぅン！」
ぬちゃり…ぬちゃり…と
いやらしい音が美琴の耳を打つ。
少女に対して本当の陵辱が
開始された。

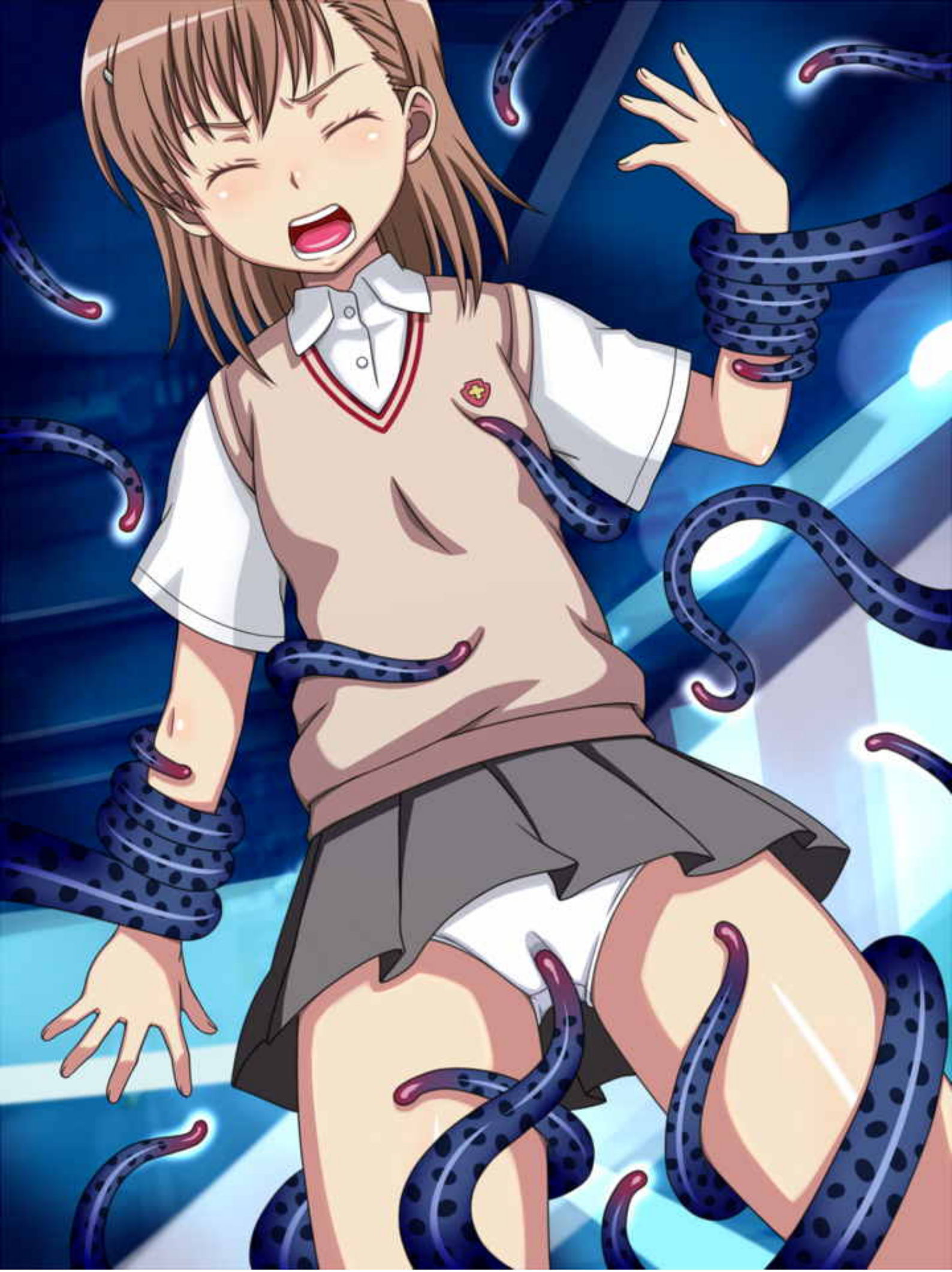
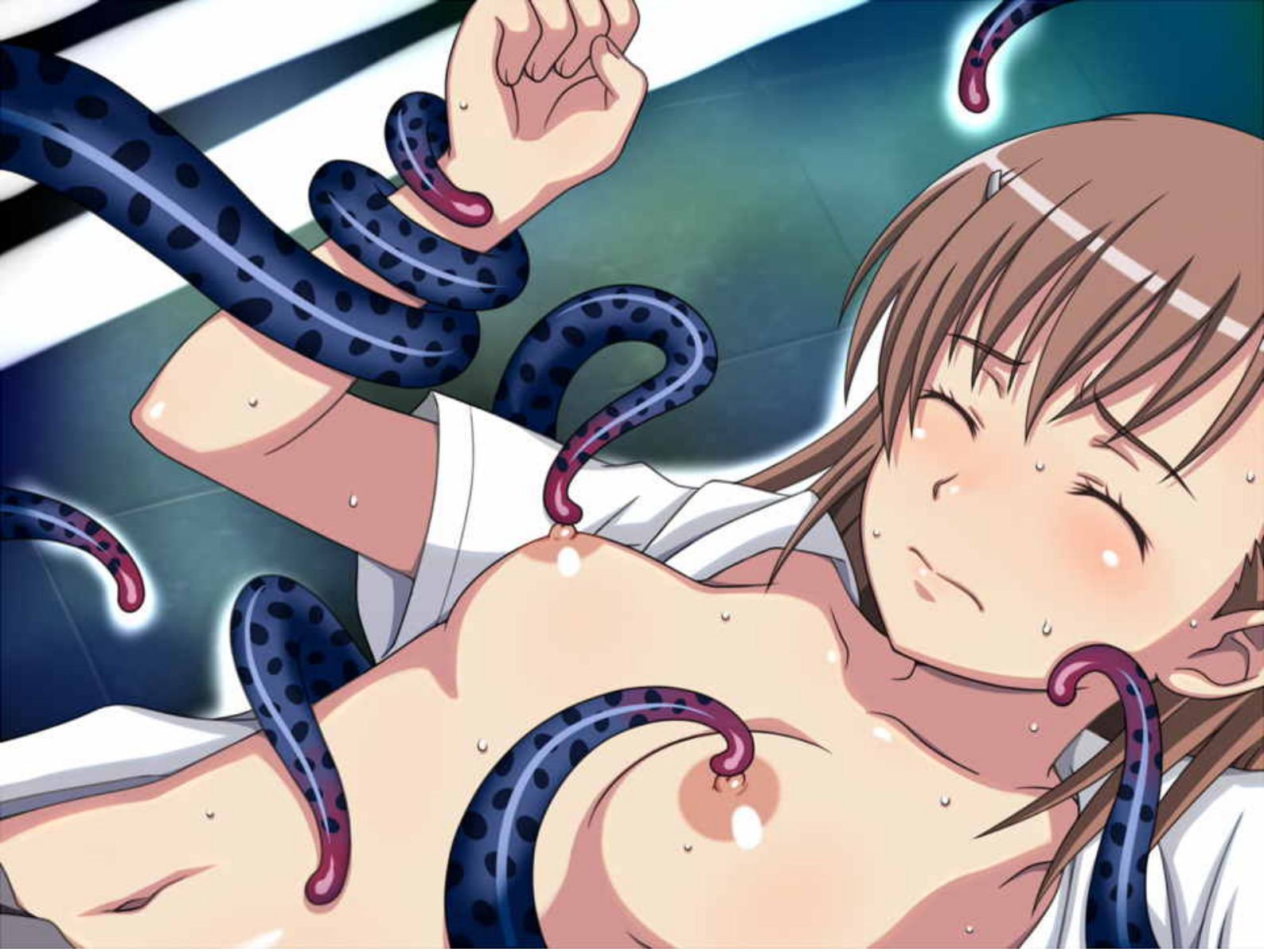
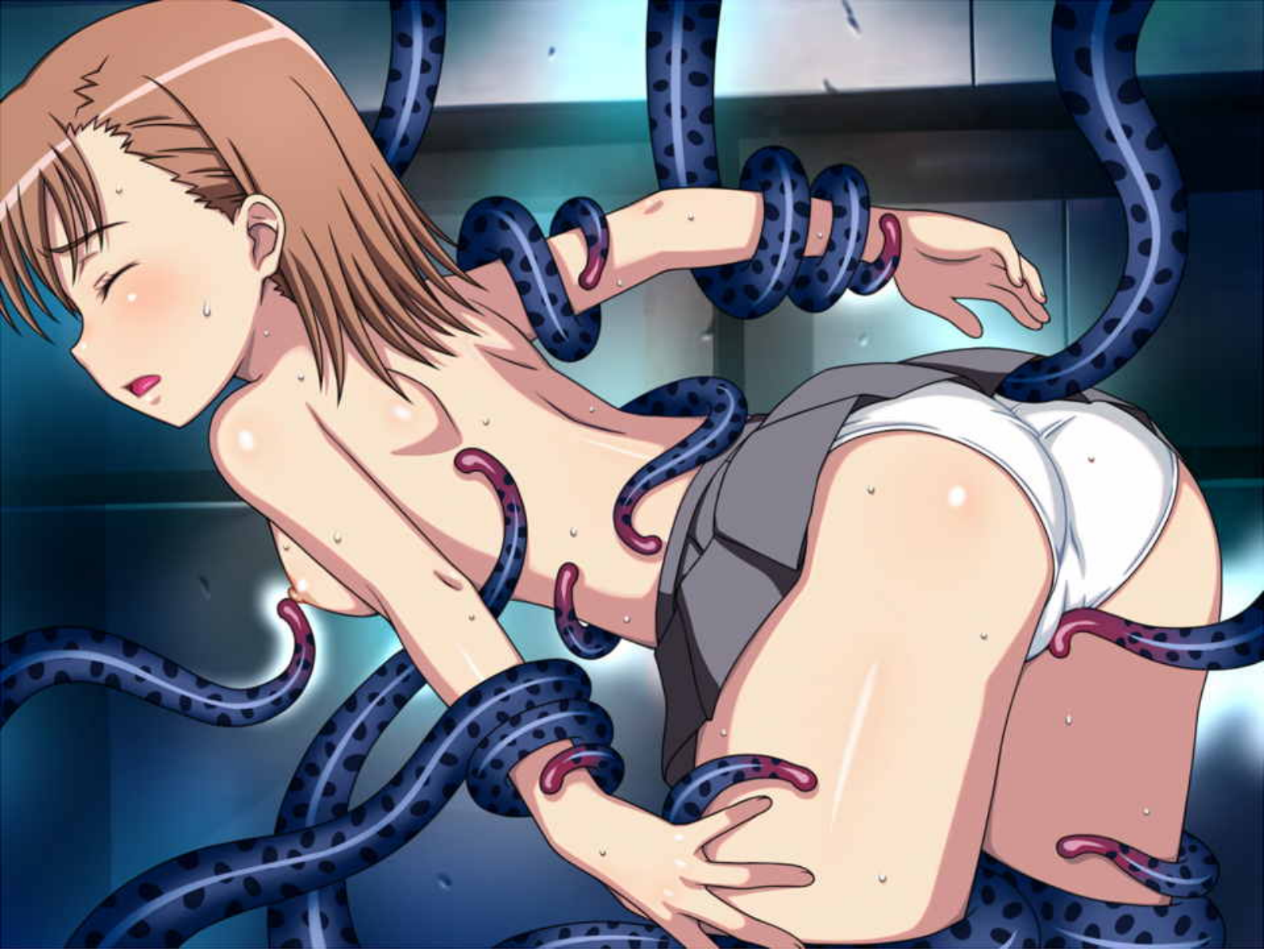
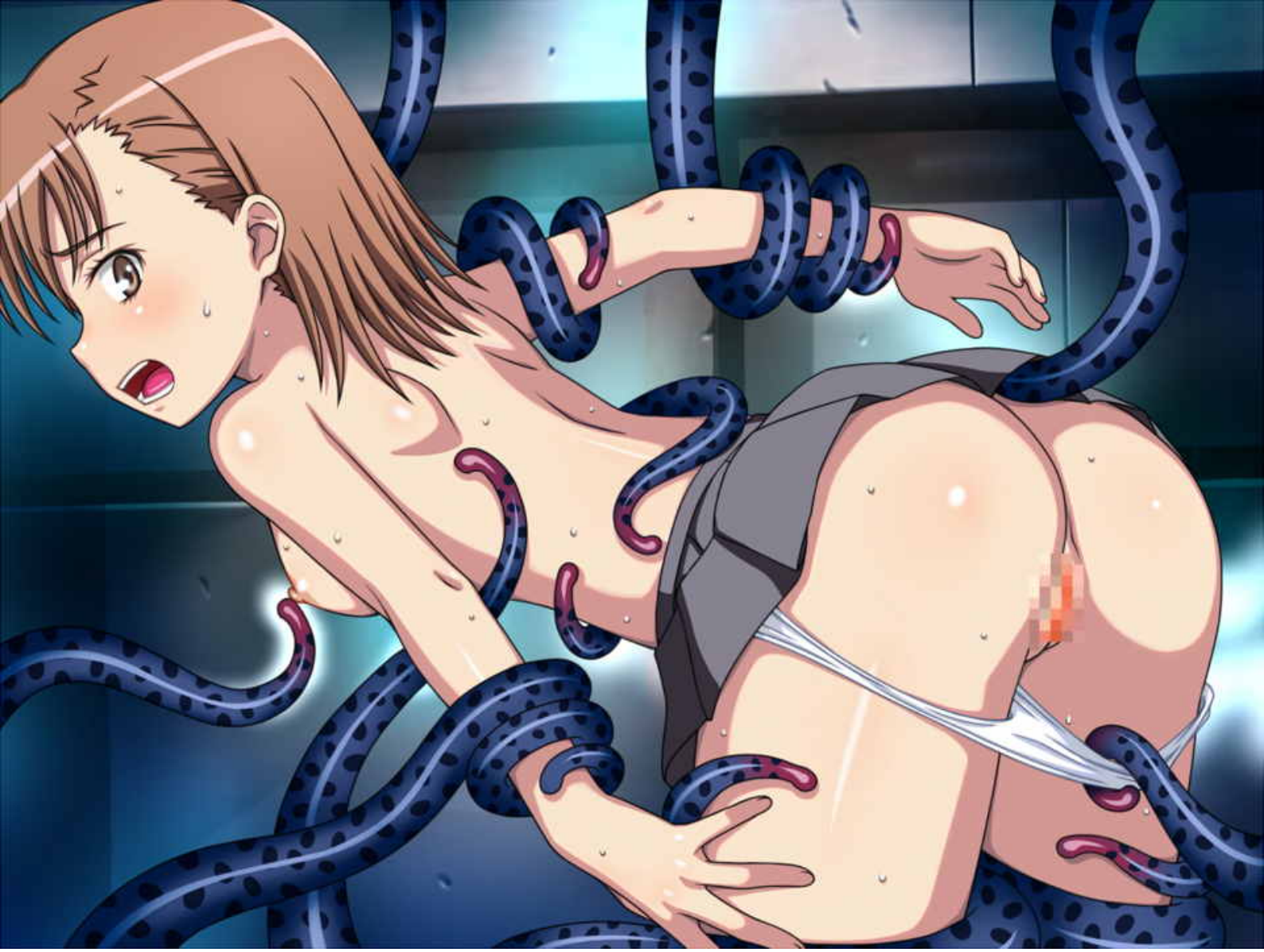
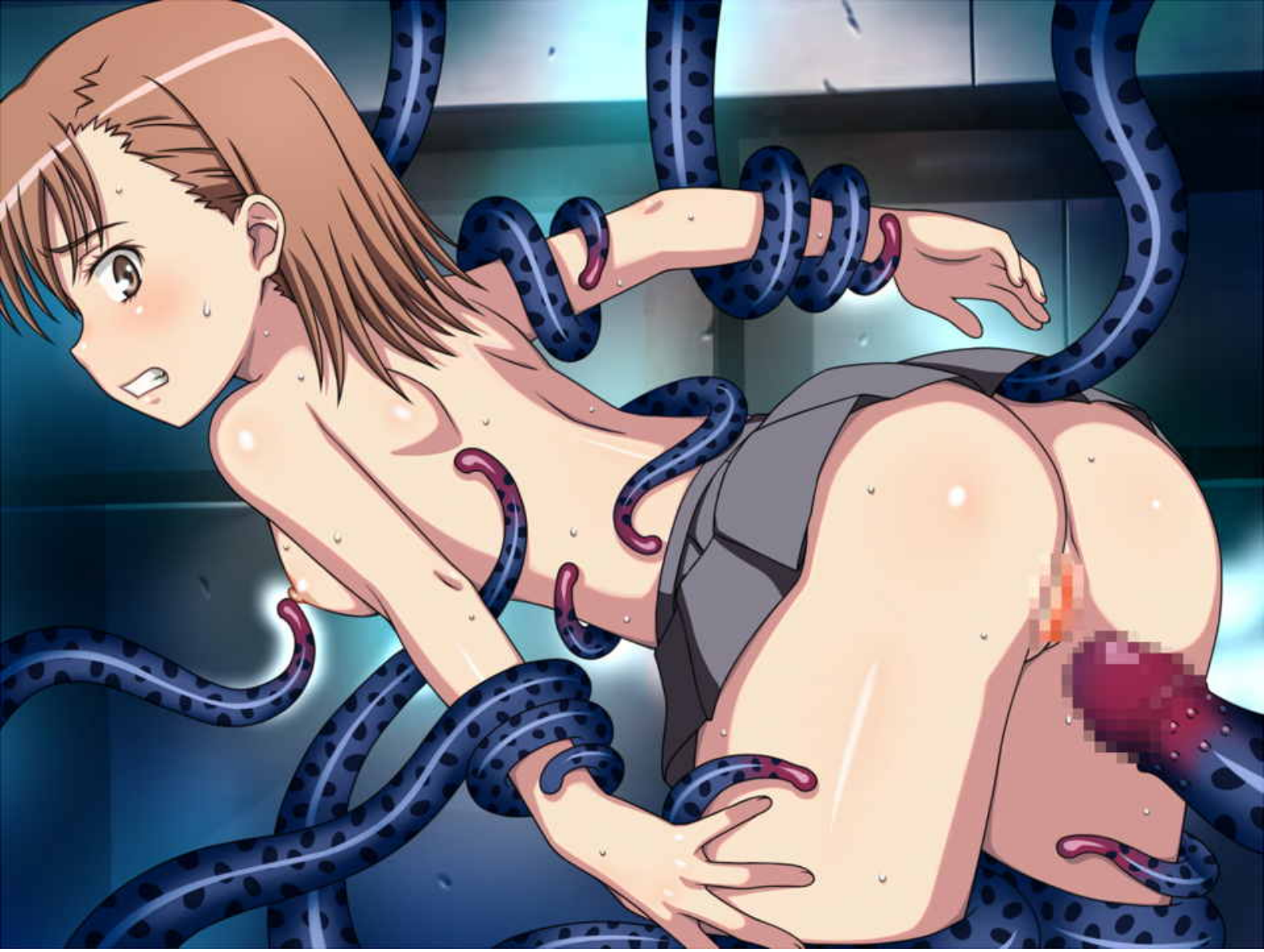
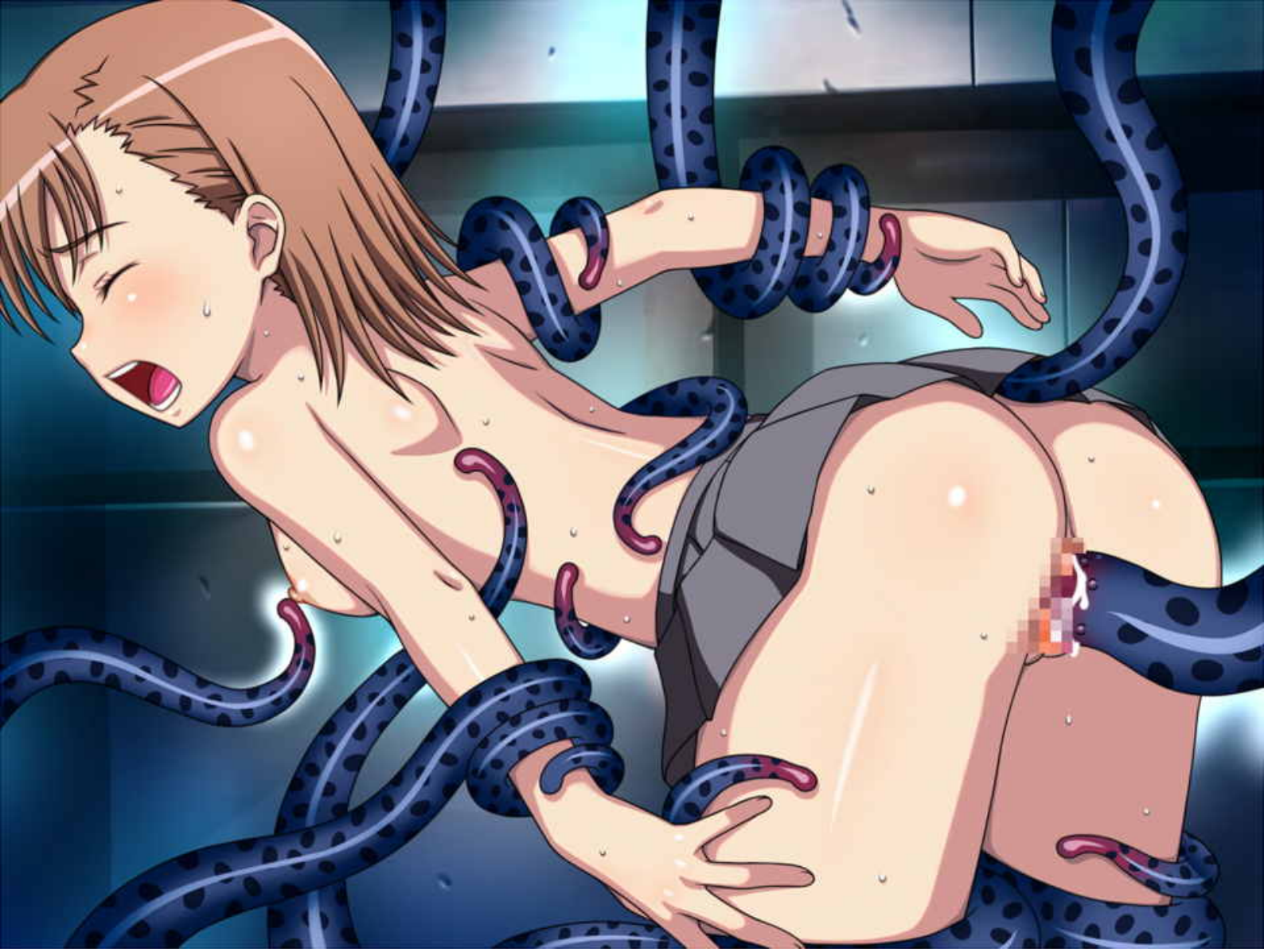
「いっ…ふあああぅ！
やっ、あああッ……！」

触手はクネクネと、
蛇のように踊りながら
美琴の女の部分を楽しんだ。

ひしめく肉ヒダがかきわけられ
膣壁がこすられて刺激されるたびに
美琴が今まで知らなかった感覚が
身体を走り抜ける。

「ンンンンーっ！」

触手の圧力で押し広げられた膣口から
赤い雫が一筋垂れた。
それは、ほんの少し前まで、
彼女が純潔だったという証である。

「ふあぁ……あ……。
ひ、酷いよ……。
初めてがレ○プなんて…」

無様に犯されている
惨めさと悔しさに、
美琴の目から
涙がこぼれ落ちた。